

小特集

東日本大震災から10年、宗教専門紙における連載記事

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方を中心に2万2千人以上の死者・行方不明者を出す未曾有の大災害であった。大地震、大津波に加え、東京電力福島第一原子力発電所事故は今もなお、被災地に深い傷を残し続けている。

被災地には長期にわたって避難所となった寺院、物資の配給や炊き出しの拠点となった教会、復興祈念公園に鎮座する帰宅困難地域の神社の分霊を祀る合祭殿がある。月命日前後の海岸回向を絶えることなく行っている僧侶、元仮設住民の孤独死や自死を防ぐ取り組みを続ける牧師らの姿がある。東日本大震災から10年の節目を迎え、2021年1月から3月を中心に、宗教専門紙では当時を振り返り、道半ばの復興の歩みや宗教者の取り組みを伝える様々な連載記事が掲載された。本稿では宗教専門紙における東日本大震災に関する連載を整理する。

『神社新報』 — 「東日本大震災 発生から10年」

『神社新報』の連載は3月8日と15日の2回しかないが、15日の記事には岩手県5社、宮城県7社、福島県9社に携わる神職の語りが横断的に紹介され、被災地域の神社の今を伝える紙面構成となっている。いずれも「地域の中の神社」という視点が強く見受けられ、写真も多く掲載されている。

3月8日付の記事に注目すると、復興の進む街の様子と変わらない鳥居、神社に続く階段で子どもたちがトレーニングに励む姿、時間が止まったかのように見える帰宅困難区域の街並みと神社など、地域の風景とともに神社が写真に収められている。氏子らと地域の伝統を絶やさぬよう奔走する神職、新しく家が建ち並んでいった地域では新しい伝統を築き上げていきたいと話す神職な

ど、再建の進む地域と神社の現在の姿も伝えられる。一方で、避難先への氏子の定住による神社をめぐる環境の変化、少子高齢化など、課題は多いことも記される。特に2020年以降は、新型コロナウイルス感染症の影響による復興計画の遅れ、感染拡大防止のため直会なおらいを中止せざるをえないことなど、新たな問題が生じていることが紹介される。

『仏教タイムス』 — 「東日本大震災から10年 10～20代で震災を体験」

被災地の寺院住職の取材を数多く重ねてきた『仏教タイムス』では、震災から10年にあたり少し視点を変え、若い世代の目線から震災を振り返っている。新年号(1/1)に「東日本大震災10年企画」として、震災当時10代だったお寺の子どもたちが震災をどう受け止めてきたのか、若い世代に震災の記憶とその後の歩みを聴く特集が組まれた。以後、1月14日号から3月18日号にかけて、10～20代で震災を経験した若者たちの記事が掲載された。全7回の連載では、11ヶ寺の男女と立正佼成会所属の女性が紙面に登場している。震災を経験したからこそ僧侶になったと語る者や、避難所となった寺院で支え合う人々に触れ自分なら何ができるかを考え続けたとする者など、震災を経験した若い世代が選択したそれぞれの歩みが描かれている。被災地の復興が若い世代の姿に重ねられ、希望を感じさせる連載である。

『新宗教新聞』 — 「東日本大震災から10年」

今号の収録期間内では『新宗教新聞』は1月1日と2月27日に発行されており、3月の発行はない。このうち「教団・教会の責任ある立場にあり、信者会員に寄り添い続けた東北の新宗連加盟教団の方々に、当時を振り返っていただき、現在の思い・願いを寄稿していただいた」として、3月11日直前の発行となる2月27日の紙面の1面に、大和教団事務総長の平松千明氏と、立正佼成会郡山教会長の安井利光氏の寄稿が掲載される。なお『新宗教新聞』4月27日の紙面には、2月27日と同じ「東日本大震災から10年」の白抜きの見出しで犠牲者慰霊・追悼行事の様子が紹介されている。

『キリスト新聞』 — 「東日本大震災 特集『それぞれの10年』」

『キリスト新聞』では3月11日と3月21日に2ページにわたる巻頭特集が組まれている。注目しているのは、現在も被災地に残り続ける課題である。震災被害は現在進行形なのだということが示されていく。

3月11日に掲載されたミッション東北会津聖書教会牧師の高橋拓男氏による「『復興』の陰に無数の物語ストーリー 被災地になお残された課題」と題された文章は、各紙の連載の中でも異色である。ここでは、復興に携わる人々の献身や慰霊の催しは「定型のストーリー」として多く紹介されるが、ボランティア受け入れによって経済的負担を強いられた牧師、支援者らのバーンアウト、補償金をめぐって生じた人間関係の分断などの「影のストーリー」はめったに表に出てこない指摘される。被災地には「ハレルヤ！」とは言えない「影のストーリー」が無数にあることを受け止めて、耳に心地よい「定型のストーリー」だけでなく、「影のストーリー」の中に隠されている神の恵みと栄光を捜し続けていく次の10年でありたいと締めくくられる。なおこの連載は2021年4月と5月にも掲載されている。

『カトリック新聞』 — 「わすれない 復興支援の現場から」

『カトリック新聞』では2015年3月より「わすれない 復興支援の現場から」がクリスマス号など特殊な場合を除いてほぼ毎号連載されてきている。東日本大震災発生から4年後にスタートしたこのコラムは、2021年3月28日掲載分で270回目となっている。文字数としては700～800字前後と短い、毎回1面、もしくは2面にカラー写真付きで掲載される。カリタスペース（ボランティア拠点）の裏方、被災地域の修道院の修道女、都内キリスト教系大学の被災地支援センター職員、教区の災害対策チーム、対日外国人支援センタースタッフなど、コラムの書き手は多岐にわたる。バトンを繋ぐように続けられる連載をたどることで、時間の経過とともに進む復興の歩みと、その時々、の社会情勢の中で工夫しながら続けられる宗教者らの支援のかたちを後世に記録として残すことができるだろう。

なお4月からは「被災地の人々とつながり続けたいと願う教会の姿勢を示すため」（4/4）、連載タイトルは「わすれない つながりの現場から」に改められた。現在も連載は続いている。

『クリスチャン新聞』 — 「『私の3.11』～10年目の証し」

『クリスチャン新聞』では3月7日発行号において、「特集・東日本大震災～あの日から10年」という特集が組まれた。この特集に向けた取材として、2020年12月より震災の体験や記憶の継承をテーマにしたインタビューが行われた。連載「『私の3.11』～10年目の証し」はこのときの取材をもとに書かれたものである。3月21日からは新たな語り部を迎えた「第二部」が始まり、現在は「第三部」まで続いている。

連載初回では、連載企画の背景として次の問題意識が記されている。「各地に行政などによる『伝承館』や記念施設が次々と建てられた。震災の記憶を継承する貴重な場だが、そこで伝えられる記憶は一部であり、一定の方向づけがある。聖書的世界観、歴史観をもつ教会、キリスト者は何を伝えるべきか」（1/3・10合併号）。個人の記憶を共同体の中で統合し「歴史」として伝承可能なものにしていく過程で、人々が抱いていた感情や具体的なエピソードはこぼれ落ちていく。しかし一方で、権威によってつくられた「歴史」の在り方を揺るがすものとして、記憶や証言を手がかりにした新たな歴史叙述の方法も模索されていると紹介される（キャロル・グラック監修、富山一郎編集『記憶が語りはじめる』東京大学出版会、2006年）。本連載は「キリスト者の観点では、一人ひとりの証しこそが歴史を補うものとなるだろう」（1/3・10合併号）という立場から、「歴史」を「記憶」で補うため、その第一段階として東日本大震災の体験者が自らの記憶に向き合うことをテーマにして組まれた。災害時にどのような聖書の言葉を思い出したか、どのように礼拝したかなど、複数名のインタビューを組み合わせながら、キリスト者が経験した東日本大震災とその後が重層的に描かれている。

『中外日報』 — 「東日本大震災10年 いのちの現場から」

『中外日報』では2020年9月より、ジャーナリストの北村敏泰氏による「東日本大震災10年 いのちの現場から」が連載されている。ひとつの寺院を結節点としたオムニバス形式で、住職、檀家、地域の人々が、絶望的な状況においても支え合い、祈り、再び歩み始める姿が北村氏の緻密な取材から再構成されていく。瓦礫と泥の中に散らばる遺体、安置所に収容しきれない子どもたちの遺体が土手に敷かれたブルーシートに並べられていた光景など、読み進めるのも辛い

現実が静かに綴られていく。『中外日報』の3月の紙面では、震災関連の記事に「東日本大震災10年」と統一されたロゴが添えられている。

『文化時報』—「復興へ 福島春 東日本大震災10年」「果てなき支援 東日本大震災⑩年」

『文化時報』では1月と3月にそれぞれ連載が組まれている。1月は「復興へ 福島春 東日本大震災10年」というタイトルで5回にわたり連載され、10年目の節目を迎える福島県の寺院や檀信徒・門徒らの歩みが紹介される。東京電力福島第一原子力発電所事故の爪痕をたどる本連載の最終回では、浄土真宗本願寺派善仁寺住職で、2020年10月より福島県飯舘村村長に就任した杉岡誠氏のインタビューが掲載される。3月には「果てなき支援 東日本大震災⑩年」と題し、大規模災害時に宗教者に求められる支援とは何かを、長く活動を続けてきた人物らへの取材から考える記事が全5回にわたり掲載される。『新宗教新聞』以外の各紙の連載では新宗教教団が行ってきた支援活動はほとんど触れられていないが、3月8日付の記事では、黒住教教主の黒住宗道氏が事務局長を務める岡山県内の超宗教・宗派の団体「人道援助宗教NGOネットワーク」(RNN)の取り組みや、黒住氏の被災地訪問などが紹介されている。なお、3月29日の紙面には、本連載を補完する記事「取材ノートから 安岡遥 果てなき復興」が掲載される。新聞やテレビの報道でしか震災を知らない記者が、被災地域の宗教者の話を聞く中で得た気付きが記される。また3月の連載後も、3月22日と3月25日の東日本大震災に関する記事には「東日本大震災⑩年」の統一されたロゴが添えられている。

おわりに

以上、2021年1月から3月にかけて宗教専門紙に連載された東日本大震災に関する連載を概観してきた。東日本大震災は地震・津波・原発事故の複合災害であり、広範囲にわたる地域が被害を受けたので、各紙の連載で示される事例も様々であった。各紙に共通するのは、震災発生から10年という節目となる区切りはあっても、震災を過去の出来事とせず、支援活動をこれからも続けていかなければならないという新たな決意を見出している点である。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大は、支援や復興の現場に深刻な影響を与えている。東日本大震災では、人と人とのつながりを取り結ぶ場所としての寺社や教会の役割、人々の苦しみに寄り添おうとする宗教者の姿が評価された。コロナ禍にあっては、これまでのように直会で氏子とのコミュニケーションを図ることもできず、カリタスペースでもボランティアの受け入れを中止せざるをえず、慰霊法要も規模を縮小して実施するほかなかった。感染拡大防止のため移動が制限される中、多くの取材でZoomや電話が用いられていた。

コロナ禍で人と人との直接的なつながりやふれあいを前提とした支援のあり方は変更を強いられている。そして「10年」という節目を迎えたという社会の側の認識は、震災を「過去のもの」としてしまふ危険をはらむ。『カトリック新聞』の連載が「わすれない 復興支援の現場から」から震災10年を経て「わすれない つながりの現場から」と改められたように、人々の苦に向き合い続ける宗教者たちは、これからも被災地と「つながり」続けていくのだろうか。10年を区切りとして支援を見直す教団もある中で、またコロナ禍という困難な状況において、宗教者に求められる支援の在り方が模索されている。

[文責：丹羽宣子]